



利五
1977
12



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written in dark ink on aged paper. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The script is dense and characteristic of a specific historical or regional style.



1977
12

玉海集追加付向卷上

春之部

まゝくけつつまもつふ月

鏡餅子代の朝みやみくわん

可軒

烏帽子のうつらつらむじ水鏡

つと井のくく役よまのり

河地氏
正量

こねや海音と色むし書物

一巡の梅の發白のまきありて

惠休

行のくもくまにわらわ

た義長や若んくれくま

大津
光繼

門とくゆきあひ午あす可歳

暖羞よあくく霧龜のくけそ

可軒

門はあきわらう竹も大所

緋搔りこくつこ家居のくめはて

同

あのみつらもの許のあし

揚州西官住

初まのつらふにまよはほ連らりて

正剛

まはねてしゆくゆや宿はる

井持氏

おても月のまららりゆく

友禊

ふまらりまのまらり

大井氏

まらり他方のまらり乃ねれ月

重次

鴈くるはよまのこを念ひれ

但野長谷川

そそあけりやう花のうらま

吉是

床の香煙乃そまの脇指

鎌上野信行寺

うすくた花の流の枝こめて

一香

つらまらりまのまらり

押せりてまのまらり

作者志

あれ世邊のまらり

江州彦根岩殿

花のまらりまのまらり

正秀

まらりまのまらり

たけのまらりまのまらり

揚州西官住

秀貞

千尋とさしちむるも花のあまにけ

松のゆるゆるなる花のゆるゆる 可松

日毎にゆるゆるなる松のゆるゆる枝

たぬ池の水の霞のたぬけ 野瀬氏 宣利

正章于白布

運よ日脚の思徳を志れ

雨と露ともあつて花のゆるゆる

日 平はなとあつちきれ果され

次郎坊やちり守言根の花乃雲

日 さよもろくあつちきれ果され

藝能の奥儀を志すもかきあはれ

まへにさしちむるも花のあまにけ

江列八幡伴氏

山畑のゆるゆるなる花のゆるゆる 資次

山の雪もゆるゆるなる花のゆるゆる

人参のゆるゆるなる花のゆるゆる 小川氏 忠貞

あつちきれ果され

双ひさきと源氏の春の花のえん 和州郡松平氏 重利

まゝとあらねいふあうれい

横澤福良

正伝

花さくしの餅のみあやみ椿と

節舎の場であくひんとする

吾入

然うしてまゝなるかゝるを鶴合を

鈴とありぬる古文の中

虫魚

松村のけしや新らねとつりそ

大易のひくく伏羲の世代の書

梅室

芙蓉牡丹の草一も萌出歌

井筒よせいをくくくもまね

喜多氏

秀硯

庭中よ実植れ桐うくくおて

まじりとも葉風は胡蝶はまじ

少文

生敬

葉このめくれいりる園ありある

こゝろつるはくくぬとそとる

梅室

積壇の座次中よれれあし

あきりこふの花れまじり

梅室

廣庭よあつらふ的のりくくめ

韋の門もさしけりうらとめ

正信

和琴の八樂れうそりうら春

貞室

ひらきかき書ハ花鳥の情うて

可頼

夫人れあまうらまきすは傷あつ

極端のやううらまれうらうら

梅守

まの由流の毎れのりうとめ

菅笠の役者よししうらうら

可頼

古書の数ハあまうらまきうら

柳の鞠の切者見えたり

月

柳の下よつたはつけぬり

わらうんとすう薫ゆや梅の花

月

よあいの隅ものうらうら

まうら石れうらうらと居て

月

あまうらうらうらと山門乃あ

花うらうらと花うらうらと度

月

糸物の屋をあれて目うら

長閑い朱萑のよめ不明なて 月

面いさく海色洛中一乃者

極つけて実茂川少せく柳糸 貞室

え方ううのうら蓬菜の臺

秋篠の里よもまや鏡守らん 月

源氏の巻い名きん志くねす

花おつろく約甲斐く垣隈も 月

味 ひくきそめくうまの念町 月

山里の花小馬うくくそく事て 月

まぬまのくわいれいこ

くうわうらうれまにうりやわが 月

あつらのあまうすけ藍とくふ

我魂やぬひてかりわらまれ暮 月

さつやまてわら小鳥の村鳥

猫やうらうれの木籠力うあし 月

来迎拜む神のまきりこ

一

一

大石氏の後唐とせしむるのま
夏
歳葉はまきしむるや花の袖
兼仕のくはもてらるるの夜
月

夏之部

あつとくちうさ夏山
生れ付し藤よのさくらん
不如歸と鳥の志さふあつと
うひり垂て水簾もくつく山車
あつとくちうさ夏山
草のうらまふ泣くつるなり
あつとくちうさ夏山

伊集

番青

荒川氏
云共

兼名野
山井

とくもうとくたのりつるさ月あよ

桂つりくくこ半夏生あ

中川氏

盛吉

あかさくもくくはくくくくく

鶴よけの繩のさくくくくく

勢州富田辰次

益吉

さくくくくくくくくくく

とくりくくくくくくくく

突流

食もすくくくくくくく

四季のくくくくくくく

権左衛門米原辰次

源因

せり石よあくくくく

照つくくくくくくく

紀州池野氏

津道

とんてくくくくく

狭道よ蚕のあやさくく

播州三木

受一

棧あよくくくく

お出をくくくくく

山井

とくくくくくくく

ちくくくくくく

水戸山縣

不競

形義みきりのり〜

のり神や松茂の競るよあめれん 但洲生野中巖 安房

一糸れ過る〜

まうり〜 貞室

河尔の色〜

ん食よ〜 同

百た〜

ま〜 同

お〜の冠は〜

〜

花〜射菰は胡蝶いた〜 同

夏〜松のや〜

紫〜 同

あ〜

竹切の目〜 同

す〜

如所の眉作してさきかじわ 月

あゝこゝのうまぢいあゝあゝ

ゆ〜ちもたに〜あ〜り 月

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

涼よの揺揺授の物〜れす 月

秋之部

たは鳥ね虎の法定り身あむ

秋の部はあつれたり新古今 仰光志

秋の系気のあるれさる人

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ 後心

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

秋風はあつれて枝はかりひさ 光茂

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

躍のありありあゝあゝあゝあゝ 正則

接列西官

河州壺井村多農

南都松木氏

だて一車の縄とちり

尾州徳田意三和右

きこし揚灯籠やあけぬらん 一甫

つゆかき所始つらん横ひり

池田佐復氏

しーの秋ひけりり十分 正次

舟よ移りて悔つと目さ懐

執刀列富田歴氏

石臺の草花不様のしらくれ 忠勝

あの花いんくくもあつはあわけ

虫籠のじりも野うても勢 可頼

あき酔もひきとく

羽列山形高田

んかうとまのしり物の虫喰く 重親

あきのきもあつはあわけ

くしあふ心標とを懐もよまき 梅号

夕暮くくもあつはあわけ

浅橋のしりあつはあわけ 秋風よ 定素

羽列長崎大根田

火燈よ似る波のま月

穂よつる露のね霧風あれて 右下

白衣のこけは縫あけそとる

目たぐいの鴨と帯はあゆみそ

利宣

為帯は物心くさる着のた

巻はあつこふ帯のまじら

梅室

綿の語はさむらゆ

とれなると子持のおもひのた軍

高友

きりりこわくくさるる後の月

平家の語や長乃あつくと

可頼

あよめの中あつ南冷しや

楮もなま〜わりのあつくと

大井氏
重次

陰着〜〜〜くちの乃ゆ

美^カ璃やこけ月影おみくらん

梅室

くち〜〜〜おみくらん

河童のあ〜〜あゆみ月あけ

春宵

梅糸の枯のゆ〜〜〜

何跡はあゆみのゆ〜〜〜

紀州村松
本長

きんあゆみ

ひらりと歌うつきの新はゆ 梅室

木のまわりを歩くと

月の光にみちみちて 同

静かなる夜の静けさ

半信半疑 揚子

しんがら

昨日と比べて大分心射す 矢種

小町くちの木の野

はるかなる 右下

たかき

月を眺めて 築

いよはる集

月を眺めて 丹波黒井 退歩

あつた月

三河の里 揚洲西宮 正則

東のく河代を記し

七ツや若手しあるはちり

英英

長くと世通る月のお

くくの松公さうや借鏡

過写

さや人くせ東念仏

堀成ついでく月も湯田川

正位

十羅刹女乃利生だ

くいまりる手由らん三年の月

可頼

林少けてく寺々元奥

証のく清くきき亭の中

巳

波るよ水くく杭乃花

尾花する野道 東屋れはるん

清長

きくくく尾花はる江の月

油のくくくくくくく

無名

女帝花のくくくく

腐くくくくくく

正寿

ふりふりふりふりふりふりふり

羽州

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

天井氏

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

羽列山形大野氏

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

肥後熊本宮田

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

志あるとてしうの月傘洋

と物も中お撲の場ととああける 同

あゝぬのたれ菩提樹の露

仏手栴の枝の鈴風とつゝあて 同

海の面あれて海老たてぬわ

月とく〜けつらら〜 同

はの世のま〜りれな〜れぬ〜

小笠月あ〜ふた方とも非 同

日教傳てかむの湯よりちきり

月とく〜く〜のふ〜 同

枇杷あ〜る火〜と〜

津嶋あ〜り〜と〜 同

仙人あ〜るあ〜る〜

あ〜く〜よ〜と〜と〜 可転

八坂の〜あ〜る〜 貞室

大坂あ〜る〜と〜 精也月の結

水たれよひに露もあつて
同

子猫来よや味つちあつて
同

香る夜もあつて
同

八敷のよ家の枯つて
同

つりつゝの粟らえ板のあつて
同

萩たふも萩つて
同

菊亭よ菊つて
同

さつさつとさつさつと
同

と修くちあつて
同

立地れつて
同

膳のきまよあつて
同

穂よつて
同

鴈来紅つて
同

豊のつりつて
同

屏風よやなつて
同

冬之部

人悔終いしく引こむ

冗態のありしや冬りま

踏まむりくもる竹まのこ

教し手水のゆやこむる

寝耳よひそむ草の作無礙

寂あそむれ糸懸しちるしゆ

羽州

本是

利宣

可頼

そくしる

物寄れあふにひひつけたり

染ししむむとみろ魯の鳥

書ししむしあ鳥の海

魯持ししむしあ鳥の海

我一物のむばみり孫

魯の珍しむのゆもてり

大にししむしあ鳥の海

魯人も人ばししむしあ鳥の海

揚外西の位

重正

本是

利宣

利宣

よきの紅地もさうあつらん

あふあふとよひあてらるる海の花 勢利富庚歌 無吉

みのあつちきさびく山度らふ

やまを登に絶つて敵の海を登して 貞幸

雲のあてふねさふひゆえ

雲うらあひいつくれさる事 春宵

うらあふ綿いささうらう

うらうらと袖おさきもあつらん 中山氏 秋耐

雪の膚にそれとやのあへ

やううと浮やあつたあゆえん 梅室

水の月うらうたにかりゆえん

きううらふもささくささくささく 春宵

うらうらとあゆえんよあゆよ

あきさきようたき菊冬の梅 松木氏 未定

けしきのそとあゆえんあゆ

あゆのそとあゆえんあゆ 右ト

貞徳居士を慕ふ

門を叩くれぬお月の御慈悲

泣きとさゆり糸みれしと
可頼

あのかげ城のふるよすま

あもーいし神楽のあいのくこい
志喜

あなとのくこいきりよとす

常合の魁のるいりくくたる言
志真

池のまわりくんとをせとる

鉄炮よあのを鳥やされぬん
徳太郎

肝とつらやる鉄炮のをや

吉中めの竹藪ちくこき
貞盛

貞徳居士十二回忌よ

お月のしらやきくあー丸の歌
英英

あーあめのほの暮松樹のあ
可頼

月次

あーあもーいしおちやよとく人魂

ちんたる響り波りかたりく 貞室

響よと〜れ〜あちあひる

くれり井の響の響つひらあはじ 月

貞室居士十三回忌貞室午

三百の興りよ

貴は守り魄とつらく宮の下 大正安 重次

空きくら〜よ小ひ〜とせ 貞室

貞室をよよ

響りらねむハ袖たひあへ

芭蕉のうらぬ〜むむおお 月

二十回忌の月〜と〜

信らと非耐〜くあれた師備 月

〜の響いや〜と揺らん

唄の〜ら本サウつひ君に技きけて 月

〜〜〜〜あれすのお

お月〜ら〜と〜あお〜つら〜い 月

藤之部

酔ひてすくもくさくさくせん

とけの首達ハ巾着のト

春宵

思ひハ絶ぬものごとく傳ふ

ひりもれくれいせいの橋をたて

江別鼻
孝吉

又月もにありせくもくさくさく

花脚のそつハ杖をりかり

伊集院

名もあついでんれ海のうらもろや

一度又古のゆめをいふ

松木氏
未友

よろくすくもくさくさく

起せし歯をうらもろぬ橋乃友

越前福井
可御

あはれめくさくさく

貫さの綾とてのめれぬら

利宣

後舎れ伝書りていふ

大塔れみやとれと成りありて 可頼

一儀の中ありて成りありて

西宮火野

家と成りありて成りありて 後頼

むねのさうたよやぬの山中

伊陽城下

たりありてやう成りありて 成也

はく成りありてやう成りありて

白川とありてやう成りありて 正考

何れありてやう成りありて

山とありてやう成りありて 貞室

塔離りありてやう成りありて

つらありてやう成りありて 同

とありてやう成りありて

ありてやう成りありて 文使 同

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be repeated or written in a similar style. The overall appearance is that of a personal or official record from a past era.

附

